

に任ぜられた。正徳元年〔1711〕十二月十八日従四位上左近衛中將に進んだ。吉村の治世は、元禄十六年八月から寛保三年（一七四三）七月病のため退くまで満四十年の久しきに及ぶが、その間吉村は「天資英悟、勇武ニシテ人ヲ侮ラス、恭儉ニシテ能ク人ヲ恵ミ、神ヲ崇ミ、儒ヲ信シテ仏ヲ廢シ給ハス、公事ヲ疎ニシ賜ハス、政事<sup>ミダ</sup>惟勤メ給フ」（「獅山公政治家記録」）とあるように、非常な熱意をもって仙台藩の内政改革に当り、一門衆の反撃をよく抑えて財政の再建に全力を尽し、文武を奨励し、綱紀肅正、士気振作につとめ、産業の振興をはかった。このような吉村の治績は当時幕府でも高く評価され、八代將軍吉宗は吉村を評して、「段々国元の仕置又は行跡等聞かせられ候に、当時陸奥守程に折入吟味諸事申し付け、一分の愼等も、外にはこれ無き程」と感歎し、さらに夫人（久我氏）をも「殊の外、人柄勝れ、女には珍敷<sup>めづらしき</sup>」人であるとその賢夫人ぶりを賞揚している（「伊達家文書」六一二四四五）。こうして前代の末に窮乏のどん底におちいった仙台藩は、吉村の代でようやく救済され、仙台藩の歴史では比較的安定した時期を生み出したのであって、吉村は後世から「御中興の英主」といわれた（「伊達家文書」九佐伯是保意見書）。〔中略〕吉村は隠居して八年後の宝暦元年（一七五一）十二月二十三日、病がにわかになすみ、翌二十四日七十二歳の生涯を終った。法諡は続燈院殿獅山元活大居士、大年寺に葬られた。前將軍吉宗も吉村に先立ってこの年六月二十日に六十八歳で死んだ。』とある。p. 174の注(4)をも参照。

資料 大日本地名辞書（吉田東伍）

## 160. 山南敬助は仙台の脱藩者かどうか

問 新選組<sup>(1)</sup>の幹部山南敬助は、仙台の脱藩者であるといわれていますが、果してそうでしょうか。随分調べましたが、全然きめ手が見つかりません。

答 山南敬助〔やまなみけいすけ〕について、仙台の脱藩者であるとか、仙台出身者であるとか書き記したものは少くありません。主なるものに当たりますと、

1. 「幕末維新人名事典」（奈良本辰也他）『山南敬助 天保5（1834）－慶応元（1865）。新選組隊士。北辰一刀流<sup>(2)</sup>の免許皆伝の剣客。仙台藩を脱藩したのち、試衛館道場に他流試合を挑んで敗れ、近藤勇<sup>(3)</sup>に入門した。新選組創設と同時に隊士となり副長をつとめる。ついで文久3年（1863）9月の芹沢鴨一派暗殺の折には、原田左之助とともに平山五郎を斬殺し、新選組のナンバーツーに相当する総長の地位を獲得した。しかし、土方歳三<sup>(4)</sup>〔ひじかたとしぞう〕との折

合いが悪く、また勤王論者として新選組の武力主義についていけなくなったため、慶応元年（1865）2月21日突然新選組を脱走。一説に御陵衛士伊東甲子太郎（もと隊士）と結んでの行動ともいう。だが翌22日、大津（滋賀）の宿にいるところを追跡の沖田総司に発見され、さらにその翌23日午後、新選組屯所の置かれた壬生〔みぶ〕郷士前川荘司宅で近藤勇より切腹を命じられた。介錯は沖田総司。京都綾小路大宮西入ルの光縁寺に墓がある。』

## 2. 「新選組始末記」（子母沢寛）

『山南敬助（知信）は仙台の脱藩者で、はじめ近藤の道場に立会に来て、勇のために竹刀をはじかれて、それから、この道場の門人になった。物にこだわらないあっさりした性質の武士であった。……〔芹沢鴨が殺されて〕局長は勇たった一人となった。直ちに山南敬助を推して総長と称し、土方が副長として、生れつきの才分を発揮し、目を八方にぎょろつかせるので、全く新選組は、近藤勇の手中に落ちた。……「山南敬助は仙台の人でした。丈は余り高くなく、色の白い愛嬌のある顔でした。こどもが好きで、私などどこで逢ってもきっと何かことばをかけたものです。紋どころは丸に立葵と記憶しています。（八木為三郎老人壬生ばなし）』

## 3. 「山南敬助」（大内美予子。「新選組隊士列伝」（新人物往来社編）の内）

『光縁寺には新選組がごく初期の頃、芹沢一派が壬生寺に葬られて以後、ほとんどの隊士がこの寺に葬られている。過去帳には、

「生国奥州仙台産 旅宿前川正治良

山南敬助藤原知信殿 元治二年二月二十三日

地面料金子一両 穴代金一分

経料金子二百疋

頼越姓名新選組内 山崎 蒸殿

神崎一二三殿」

とあります。彼が仙台の出である、という唯一の根拠がここにあるわけですが、果して仙台藩士であったか、禄高はどの程度の武士だったのか、いつ脱藩したのかということはいずれも不明です。』

とあるだけで、全く確証がありません。

農民の逃散〔ちょうさん〕すら重大な罪過でした。まして俸禄を受ける武士にとって、主君への服従奉仕こそ絶対のモラルでした。無断の行動は軽微なケースでも家中法度で厳禁されていたのです。「忠宗公御代御書出之覚」（斎藤報恩会所蔵）に『一御暇を申し上げず在郷仕るましく候よんところなく用所に候はは番頭組頭へ理〔ことわ〕り申すべく候尤も番油断あるへからさる事〔中略〕右条々その意を存すへき者也寛永十三年〔1636〕九月九日』。また、「獅山公〔5代吉村〕治家記録」宝永元年〔1704〕6月7日条『一 士ハ申スニ及ハス、軽キ扶持人タリトイフ共、他領ニ参り候節、奉行支配頭等ノ差図ヲ請ケスシテ相越ス事、一切停止〔ちょうじ〕タリ、

〔下略〕』とあり、ましてこれ以上の無断逃亡などあり得べからざることとするのが常識でした。しかし、その事実が全くなかったことでもありませんでした。古くは親族〔慶長以後一門〕伊達成実が、文禄2年〔1593〕政宗のもとを離脱し、高野山に亡命した事件があります。その懲罰として、<sup>(5)</sup>政宗は成実の留守の居館角田に兵を遣わし、家族・家臣全員を攻め殺したことがありました。このように、脱藩といわれる逃亡行為は重罪犯として追及され、容赦なき厳罰がつきものとなっていました。吉田松陰が嘉永4年〔1851〕12月14日、江戸の長州屋敷から亡命し、松野他三郎の変名で東北旅行をしているが、その帰路、翌5年3月18日仙台に入っています。彼の前途には土籍・家禄剥奪、身柄親類お預の厳刑が待っていました。山南敬助が、かりに仙台脱藩者であったとしても、吉田松陰その他の亡命者のすべてがしたように、追及手配を避けるため山南敬助という名は変名であり、彼自身は勿論前歴を秘匿して他言せず、国元の側にも何等の記録等が見当らず、彼が仙台の脱藩者であるかどうかは全く不明の事に属します。

注(1) 文久3年〔1863〕江戸幕府が武芸にすぐれた浪士を集めて編制した警備隊。近藤勇・土方歳三等を幹部とし、京都にあって反幕勢力の鎮圧に当たった。

注(2) 千葉周作を祖とする剣道の流派。

注(3) 幕末の幕臣。理心流の剣士。名は昌宜。武蔵の人。文久3年〔1863〕新徴組に加わり、後新選組局長、京都を中心に諸藩の倒幕の志士を捕殺。後官軍と甲斐国勝沼に戦って敗れ、慶応4年〔1868〕下総流山で処刑された、時に36歳。

注(4) 幕末の剣客。武蔵の人。文久3年新選組に入り近藤勇らと共に京都市中の警備に当る。烏羽伏見の戦いに敗れ、東下して官軍に抗し、後榎本武揚の軍に投じ、明治2年〔1869〕五稜郭で戦死、35歳であった。

注(5) p. 74の注(4)、p. 330の注(3)参照。

注(6) p. 288 の注(7)参照。

資料 幕末維新人名事典（奈良本辰也他）  
新選組隊士列伝（新人物往来社編）  
新選組始末記（子母沢寛）

### 31. 「流」とは何処か

問 「流」とは何処をいうのか。

答 「流」とは、もと仙台領で、現在の岩手県西磐井郡花泉町を中心とする地方の、中世から幕末